

## 佐藤和喜教授を悼む

近藤信義

佐藤和喜先生が教授として本学文学部に着任されたのは平成一〇年（一九九八）四月一日、そして本年（平成十四年）九月三日、死亡による退職、行年五二。在職期間四年五ヶ月と三日、なんとはいはかなさ。こんなことがあってよいのか、いまだに信じられない。

先生を国文学科に平安朝文学の領域の担当者として招聘できたことによって、当時若返りを学科の重要なテーマとしていたこともあって、国文学科は学的な軸と学生指導の充実、教員の年齢構成などをふくめ、将来にわたる構想の基盤の一つを整えたという思いがあった。事実、先生がすぐれた研究者であると同時に、学生指導は格別に熱心であり、学生へのサービスを厭われることがなかった姿勢から、よい人を得たという充足感を味わうことができたものであった。学生の立場に立つという姿勢は、教授会の発言に常々表れており、その発言への信頼感故に着任二年目にして学生生活委員として教授会より選任されていたのであった。また、その責務を果たされる真摯な姿勢に頭の下がる思いであった。

先生は独特の話術の持ち主でもあった。学期はじめのガイダンス時に、学生に向けての僅かな時間でのスピーチにとりわけ冴えを感じたものであった。日頃のシャイな居ずまいとたずまいとは様子が異なる。少年期、青少年期は苦

しい生活だったと伺っていた。また、出版社時代、高校教員時代、なかなかの苦勞を抱えていたことも伺っていた。そうした体験もあるだろうが、話にはある種の抽象度があり、すでに物語の世界を感じさせるものがあった。「私は恋をしました：」、「僕の親父はひどい親父で：」、「私は息子と喧嘩しました：」。このように語り出し、聞く学生の耳を一気に独占する。淡々とした語り口の中に並々ではない情感がこもる。聞くわれわれも、危ういところへつれて行かれそうでハラハラする。学期はじめの浮ついた心が引き締められ、緊張感のはしる。だが、すごいのはその体験をお説教めいた教訓話にはしなかったことだ。君たちと一緒にがんばりたいのだというメッセージをこめて話は終えられるのだが、なんとも重い質量を話の背後に感じさせられるのであった。つい今しがた学事の連絡やら確認やらの雑用にあった身が、サッと語り手の人格に変貌してゆく様子は、「おぬしなかなかやるな」と侍ことばを投げかけたくなるのだった。おそらく、先生の講義はこのような魅力にとりつかれた学生が集まったのに違いなく思われる。

しかし、そんな話も、あの声ももう聞くことができなくなった。今年四月以来骨髄腫のため大宮自治医大附属病院に入院。その加療の経過は決して見通しの暗いものではなく、むしろ十分な治療効果が表れていたのだった。こうした状況の中での彼の死は不慮の出来事としか思えないものであった。啓子夫人は、この間の経緯をつぎのような文面にして知人の方々へ送られている。「：治療の効あり、五月末には退院が予定されておりましたのに、初夏のあたたかな日差しの中、病院をあくがれ出て、荒川の土手近くまで散歩を楽しみ、そこで何らかの身体的な急変があって病死したものと目されております。前夜まで完治への闘志を燃やしておりました。：」。彼の若さ、彼の気力、彼の誠実から考えれば、さもありませんの文章である。「：病院をあくがれ出て：」、ふだんの飄々とした歩きっぷりが目に浮かんでくる。散歩好きだった彼らしい最期といえは言えるのだが、やはり納得しきれないでいる。

国文学科は改編によって、文学科日本文学専攻コースと名を変えた。今はこの状況に堪えるしかないと思いつつも、

これをどう打開してゆくのか。佐藤さん、この課題を一緒にやって行きたかった。残されたわれらは頼りがいのある闘士を失った思いである。われわれに宿題を預けたまま、手の届かないところへ行ってしまった……。もはや愚痴になる。

最後に佐藤和喜先生、この一年間先生の回復を願いつつ、佐藤正彦講師と共に懸命に卒業論文や演習に取り組んで、けなげに、しかもしっかりと勉強に励んだ学生がいたことをあなたのもとへ報告したい。よい学生を育てられていたと思う。どうか、安らかにお眠り下さい。合掌。

(平成十四年十二月二日)

〔主な著述目録〕

一 著 書

一九九三年二月

平安和歌文学表現論

有精堂

二〇〇一年三月一五日

景と心―平安前期和歌文学表現論―

勉誠出版

二 研究論文

一九七四年六月一日

紫式部の存在性―宮仕え以前の歌を中心として―

むらさき 一二集

一九七四年一月一日

紫式部日記試論―紫式部の存在性―

国語と国文学 五一巻一一号

一九七五年三月一〇日

古今集論―古今的〈われ〉の様相―

日本文学 二四巻三二号

一九七七年五月一〇日

古今集歌の構造とその位相

日本文学 二六巻五号

一九七八年二月一日

拾遺集歌の構造

国語と国文学 五五巻二二号

一九七九年二月一日

拾遺集歌の生成―十世紀後半の新傾向をめぐって―

国語と国文学 五六巻二二号

- 一九八一年三月一日 拾遺集時代の過渡期性―テ連接文体を中心に― 国語と国文学 五八卷三号
- 一九八三年三月一日 蜻蛉日記歌における拾遺集の変貌 国語と国文学 六〇卷三号
- 一九八四年六月三〇日 王朝和歌の展開 『王朝文学史』(東京大学出版会) 共著
- 一九八五年四月一日 更級日記歌の位相 国語と国文学 六二卷四号
- 一九八七年一月一日 更級日記論―その表現の古代性をめぐって― 国語と国文学 六四卷一号
- 一九八七年二月一〇日 新撰和歌の構成とその表現 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 三七号
- 一九八七年三月一日 恋の特色と構造―古今和歌集の部立 『一冊の講座 古今和歌集』(有精堂) 共著
- 一九八七年五月一〇日 平安和歌史論序説―歌経標式の歌論をめぐって― 日本文学 三二卷五号
- 一九八八年二月一〇日 讃歌としての「春愁三首」 文学 五六卷二号
- 一九八八年二月二〇日 古本系紫式部集の表現 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 三八号
- 一九八八年九月一〇日 土佐日記歌の古代性 日本文学 三七卷九号
- 一九八九年二月二〇日 紫式部日記の表現 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 三九号
- 一九八九年十一月一〇日 ゆ 『古代語誌―古代語を読むⅡ―』(桜楓社) 共著
- 一九八九年十一月三〇日 和歌表現の差異―流血哀慟歌第二首を中心に― セミナー古代文学88
- 一九九〇年一月一九日 拾遺集歌の位相 新日本古典文学大系(月報) 七
- 一九九〇年二月二三日 和泉式部日記の表現 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四〇号
- 一九九二年二月二〇日 和泉式部日記表現論―そのくり返しの表現に注目して― 『古代文学論叢12 源氏物語と日記文学』(武蔵野書院) 共著
- 一九九二年三月一九日 古今集の「心」 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四二号
- 一九九三年三月一〇日 拾遺集の万葉歌 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四三号
- 一九九三年十二月一〇日 更級日記最終歌は「他者」の歌か 日本文学 四二卷一二号

- 一九九四年三月一〇日 拾遺集四季部の此界性 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四四号
- 一九九四年六月一日 更級日記歌の再検討 国語と国文学 七一巻六号
- 一九九四年一〇月三十一日 拾遺集の此界性―哀傷部・別部を中心に― 『和歌文学論集2 古今集とその前後』(風間書房) 共著
- 一九九五年三月一〇日 拾遺集歌の此界性―万葉・古今・後撰との重出歌を中心に― 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四五号
- 一九九五年五月一日 多声の歌体から単声の歌体へ―歌物語の生成― 国語と国文学 七二巻五号
- 一九九五年八月一〇日 蜻蛉日記歌「胸のほむらはつれなくて」の解釈をめぐる 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四六号
- 一九九六年三月八日 拾遺集歌の此界性―神婚幻想の後退をめぐる― 『古代文学講座8 万葉集』(勉誠社) 共著
- 一九九六年四月五日 万葉から古今へ 国語と国文学 七三巻六号
- 一九九六年六月一日 嫉妬の歌―多声の歌体から単声の歌体へ― 日本文学 四五巻一二号
- 一九九六年一二月一〇日 激情としての「春愁」歌―景と心の転位の関係から― 『石井文夫教授退官記念論文集』
- 一九九七年二月八日 演技する伊勢物語歌 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四七号
- 一九九七年三月八日 拾遺集の物語性―後撰集との重出歌を中心に― 創流 四巻
- 一九九七年九月 梶井基次郎と古代和歌 日本文学 四六巻二号
- 一九九七年一二月一〇日 記紀歌謡の激情性―景と心の転位の関係から― 宇都宮大学教育学部紀要(第1部) 四八号
- 一九九八年三月一〇日 後撰集の大和物語歌 作者未詳歌 『万葉集がわかる』(朝日新聞社)
- 一九九八年二月四日 紫式部集と勅撰集(一) 立正大学国語国文 三七号
- 一九九九年三月二〇日 後撰集の大和物語歌(二) 立正大学文学部論叢 一〇九号
- 一九九九年五月一〇日 更級日記―装置としての「かぐや姫」― 『叢書 想像する平安文学1 〈平安文学〉というイデオロギー』(勉誠出版) 共著
- 一九九九年六月一六日 更級日記歌の物語性 『研究講座 王朝女流日記の視界』(新典社) 共著

二〇〇〇年三月一八日 紫式部集と勅撰集(二)

立正大学国語国文 三八号

二〇〇一年三月一七日 「天の香具山」歌の変容

立正大学国語国文 三九号

二〇〇一年三月二〇日 古今集歌と伊勢物語

立正大学人文科学研究年報 三八号

二〇〇一年一〇月三十一日 景と心―音による転位の有無をめぐる―

多田一臣編『万葉への文学史・万葉からの文学史』(笠間書院) 共著

二〇〇二年三月二日

記紀歌謡表現論―磐姫物語の差異を読む―

古代文学 四一号

二〇〇二年三月二三日

古今集歌と伊勢物語歌(二)

立正大学国語国文 四〇号

二〇〇二年一月一五日 紫式部集と勅撰集―転位の有無という観点から―

『紫式部集の方法』(笠間書院) 共著

### 三 書評・展望・辞書 他

一九八八年八月

〈シンポジウム〉作家とは何か 表現の差異としての〈作家〉

セミナー古代文学 87

一九九三年三月

平成三年(自1月至12月) 国語国文学界の展望(3) 中古 古今集以後の勅撰集・歌壇史

文学・語学 一三七号

一九九九年五月

「恨む」ほか一八項目

『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店)

一九九九年八月十日

古橋信孝著『和文学の成立期文学史論』

日本文学 四八巻八号

二〇〇〇年三月

「うらみ」ほか六項目

秋山虔編『王朝語辞典』(東京大学出版会)

二〇〇一年三月三日

景と心―古代歌謡研究展望―

古代文学 四〇号